榧 KaYa

vol.02

亜細亜大学
国際関係学部編集

国際関係・多文化
フォトジャーナル

KaYa 02 亜細亜大学国際関係学部

ISSN 2188-3122

Asia University Faculty of International Relations

榧 KaYa vol.02

国際関係・多文化フォトジャーナル

Faculty of International Relations, Asia University

Contents

04 ESSAY افتح يا سمسم! (開けゴマ！)
アラビア語 千夜何夜物語（上）
新妻 仁一

12 ESSAY *Alternative tourism*
ホーチミンシティの「夢」空間
バックパッカー街点描
大塚 直樹

20 銅像よもやま話2
広場と銅像
高山 陽子

27 ゼミナール紹介
伊藤ゼミ
将来に生かせる“深く学ぶ楽しみ”
伊藤 裕子

32 フィールドワーク
2014年 夏季 中国フィールドワーク
三橋 秀彦

42 フィールドワーク
体験で学ぶ地球環境論「富士山清掃」
中野 達司

48 学部行事報告
AUJP　Asia University Japan Program
インドネシア人学生との交流報告
増原 綾子

50 学部行事報告
第56回 アジア祭「多文化マーケット」
新妻 仁一

榧（かや）とは

亜細亜大学内のゆうちょ銀行ATMの裏側に記念樹があります。それが榧の木です。この記念樹は、1941（昭和16）年の本学創立当初に植樹されました。先達に敬意を表わしつつ、半世紀以上にわたり本学の歩みを見守ってきた榧とともにグローバル化時代に挑戦してゆこうという国際関係学部の思いが本ジャーナル名の由来です。

亜細亜大学　国際関係学部
〒180-8629　東京都武蔵野市境5-24-10

学部についての詳細は
http://www.asia-u.ac.jp/academics/international/

『榧』はPDFデータでも閲覧いただけます。
※亜細亜大学学術リポジトリから入手できます。

アラビア語 千夜何夜物語（上）

新妻仁一

多文化コミュニケーション学科には六つの地域言語の講座が開設されている。新入生にとって、歴史的にも文化的にも日本との関係が深い中国と韓国の言葉を除くと残りの東南アジア、南アジア、西アジア、中南米という四地域の言葉は、あまりなじみがないものかも知れない。

さてアラビア語だが、この言語が主に使われている地域は、この四地域のどこだろうか。正解は、西アジアであるが、新入生に尋ねてみると、答えは、東南アジア、南アジア、西アジアとかなり分散する。さすがに中南米と答える人は少ない。

アラビア語の魅力は、右から左へ書かれる流れるような文字の美しさと深みのある音にある

これら四地域が、具体的にどのあたりを示すのかという問題もあるが、アラビア語は、新入生にとってまだまだ未知の世界の言葉といえるだろう。

では亜細亜大学におけるアラビア語教育はいつスタートしたのであろうか。亜細亜大学の前身である興亜専門学校（一九四〇年設立）の時代はどうだろう。イスラーム文化の色濃い東南アジアへの視点を重要な教育課題としただけに、ことによるとアラビア語教育が行われていたかもしれない。『亜細亜大学五十年史』を開いてみると、同専門学校開校時の文部省申請書類に言語科目として記載されているのは、福建語（一）、支那語（四）、ロシア語（一）、英語（一）、マライ語（三）、国語（一）の六言語であった。括弧内は担当教員数であり、教育の重点が中国大陸と東南アジアに置かれていたことがよく分かる。マライ語は、現在マレーシア、シンガポール、ブルネイ、そしてインドネシアの公用語となっているマレー語のことである。通常、マレーシアのマレー語はマレーシア語、インドネシアのそれはインドネシア語と呼ばれている。マレー語は、もともとアラビア文字を手本としたジャウィ文字で表記されていたが、英国の植民地時代になるとラテン文字表記が採用された。おそらく興亜専門学校の授業ではラテン文字を使った教育が行われていたと思われる。しかしマレー語に入ったアラビア語の単語や生活に密着したイスラーム文化の話を通じてアラビア語に関する基本情報は教育されていたと推察される。

アラビア語教育がスタートしたのは、第二次大戦後、日本経済短期大学、亜細亜大学へと発展していくなか、経済学部（一九六四年開設）に国際関係学科が開設された一九七六年のことであった。この年アラビア語以外にヒンディー語の講座も開設され、本学の外国語教育、特にアジアの諸言語教育は一層の充実をみたのである。そして一九九〇年、国際関係学科を母体として国際関係学部が開設されると、現在の六言語に絞り込んだ読み、書き、話すという三要素を集中的に教育する地域言語のカリキュラムが確立した。

日本における最初のアラビア語教育は、大阪外国語大学（現大阪大学外国語学部）にアラビア語コースが開設された一九二二年にスタートした。このコースは、一九四〇年に独立したアラビア語学科となった。一方、東京外国語大学にアラビア科が開設されたのは意外にも遅く、第二次大戦後十五年以上が過ぎた一九六一年のことであった。大阪外大が、創立とともにアラビア語教育を開始したのに対して東京外大は、その設立を一八七三年の東京外国語学校とすればアラビア語教育が始まるまでに設立から一世紀近くを要したことになる。そのことを考えると社会科学系の学問の研究と教育を基盤とする一私立大である本学が、前世紀の七十年代に国際政治・経済におけるアラビア語の重要性を認識し、国際関係学と言語教育を有機的に連動させた地域研究の教育体制を整えたことはその先見の明を高く評価されて良いであろう。

前世紀の七十年代とはどんな時代だったのだろうか。アラビア語の存在感を一挙に高める何か重要な出来事があったのであろうか。現在五十代後半から六十代以上の年代の人々は、ネオンが消え薄暗くなった町、トイレットペーパが消えたスーパー、高騰したガソリン価格、いわゆる石油ショックに襲われた日本社会の混乱状況を覚えているだろう。一九七三年、十月に勃発した第四次中東戦争は、資源ナショナリズムの台頭を背景にOPEC（石油

日本とアラブ諸国の文化的連帯を訴える当時のポスター

輸出国機構）の主導権を握った産油国による石油戦略の発動によって世界経済に大きな影響を及ぼした。石油戦略とはアラブ諸国に敵対する諸国には禁輸、非友好的諸国には輸出制限をかけるというものであった。それまでアラブ諸国との友好関係に安心しきっていた日本だが、なんと非友好国として石油輸出制限対象国リストに加えられていたのであった。第二次大戦後、驚異的な経済復興を遂げた日本を支えていたのは中東から届けられる資源、石油であった。その石油が届かなくなる！日本は、パニック状態に陥ったのである。これを契機として日本は中東政策において、特にアラブの大義といわれるパレスチナ問題に対してパレスチナ人の平等、自決権を支持し、アラブ世界との絆を強化する方針を明らかにすることになった。石油確保のための外交政策の大きな転換であった。まさにアラブはアブラと言われた所以である。

前述した東京外大のアラビア語科の開設にはその五年前、一九五六年に発生した第二次中東戦争が大きな影響を与えていることは明確である。これを境に中東調査会、アジア経済研究所（現日本貿易振興会研究所）という専門性の高い研究機関が設置されている。そしてこの二年後には、二次大戦後の国策会社とも言われるアラビア石油が設立され、日本の経済成長にとって生命線といえる湾岸の石油の開発、確保に向けて活動を始めている。アラビア語はまさに石油確保のために必要な言語であったのである。しかし石油とアラビア語の重要性が、中東戦争とパレスチナ問題によって注目を浴びることになったことはアラビア語という言語の周辺に紛争地域の言語という不安感が混在するイメージを漂わせることになった。

七十年代の資源ナショナリズムは、その底流でイスラーム復興運動と密接に連動していた。アラブ諸国におけるサウジアラビアの存在感の高まりと一九七九年のイラン革命がそれを示していた。

イスラーム法を国是としイスラーム誕生時の社会運営を理想として建国されたサウジアラビアは、建国から四十年を経た七十年代、膨大な石油の富をもとに国際政治、経済においてこれまでにないイニシアチブを発揮し始めた。一方イランにおいては、それまでの西欧スタイルを手本とした上からの強制的な近代化を推し進めたパフラヴィー朝が崩壊し、イスラーム法学者の統治理論に基づくイスラーム共和国が誕生した。政教分離が近代国家の原則という教育を受けてきた人々にとってこの二十世紀に登場した政教一致を掲げる国家は、前近代的な後進国と映ったのは自然なことであった。またイランの言語は、ペルシャ語であり、それはアラビア語とは別系統の言語であるが、文字についてはアラビア文字を採用していた。こうしてアラビア語には、前近代的イメージと不可解な価値観によって社会運営を行うイスラームという宗教が広まっている国々の言語という新たな不安感が付きまとうこととなった。

イラン革命の翌年、八年にわたるイラン・イラク戦争が勃発。その終結から三年を経た一九九一年には、イラン・イラク戦争を通じて兵器と軍隊を整備したイラクがクウェイトに侵攻すると、米国を中心にした多国籍軍が派遣され湾岸戦争

シリア料理、野菜、肉、果物と食材は豊か

白と青のコントラストが美しいチュニジアのスーク（マーケット）

チュニジアの街角で、市役所の方向を示す標識

旧約聖書の物語、カインがアベルを殺害した舞台と言われるカシオン山のふもとに広がるダマスカスの町

遠く離れた中東の世界だが、研究室に入ればすぐ手の届く所にある

が勃発する。数えきれないほどの油田から立ち上る火炎に人類文明の終末を感じたのは筆者一人ではないであろう。この戦争でイラクは敗戦するものの、イラクの指導体制は存続し、これを壊滅させるため二〇〇三年、大量破壊兵器保持疑惑を口実に英米軍を主体とした有志連合がイラク攻撃を実施した。この戦争によるイラクの分裂は現在に至るアラブ諸国における宗派対立や内戦を引き起こす大きな要因となった。湾岸戦争当時、アラビア語を専攻したことを就職用書類に書かないという学生がいるという話を聞かされたことがある。アラブ諸国への赴任だけは避けたいという理由だそうである。戦争と政情不安が、当該地域に対する関心よりも恐怖心と嫌悪感を呼び起こす要因となったということであろう。

一方イスラームであるが、イスラーム復興運動の広がりとともに前世紀九十年代から今世紀にも続くチェチェン紛争やアフガニスタンのターリバンへの多国籍軍の攻撃など、イスラーム主義と政治的テロとの関連性が指摘される中、それは、政情不安の中心的な要因として危険視されるようになっていた。イスラームに対する不信感、それが嫌悪感につながっていくことを象徴する言葉がイスラモフォビア（イスラーム嫌い）である。前世紀の九十年代から欧米で使われ始めた言葉と言われるが、まさに二〇〇一年の九・一一事件は、イスラームに対する嫌悪感、ムスリムに対する警戒心を示すこの言葉を世界中に拡散させ、定着させる契機となった。日本においてはそれまで遠い世界の宗教として漠然としたイメージが先行していたイスラームであるが、それが政治用語として語られ、また報道される機会が増えるごとに、イスラームに対する警戒心が増し、イスラーム用語、特にジハードという言葉は、戦闘を奨励するイスラームというイメージを人々に植え付けることになった。ジハードは、努力することを意味し、アラブ人にとって直接戦闘行為と結びつくものではない。またキリスト教徒であってもジ

アジア祭で展示した金細工、文字も模様もアラビア語履修生が書いた

エジプト庶民のおなかを満たすコシャリ

ゼミの東京モスク見学、イスラーム文化にふれる第一歩

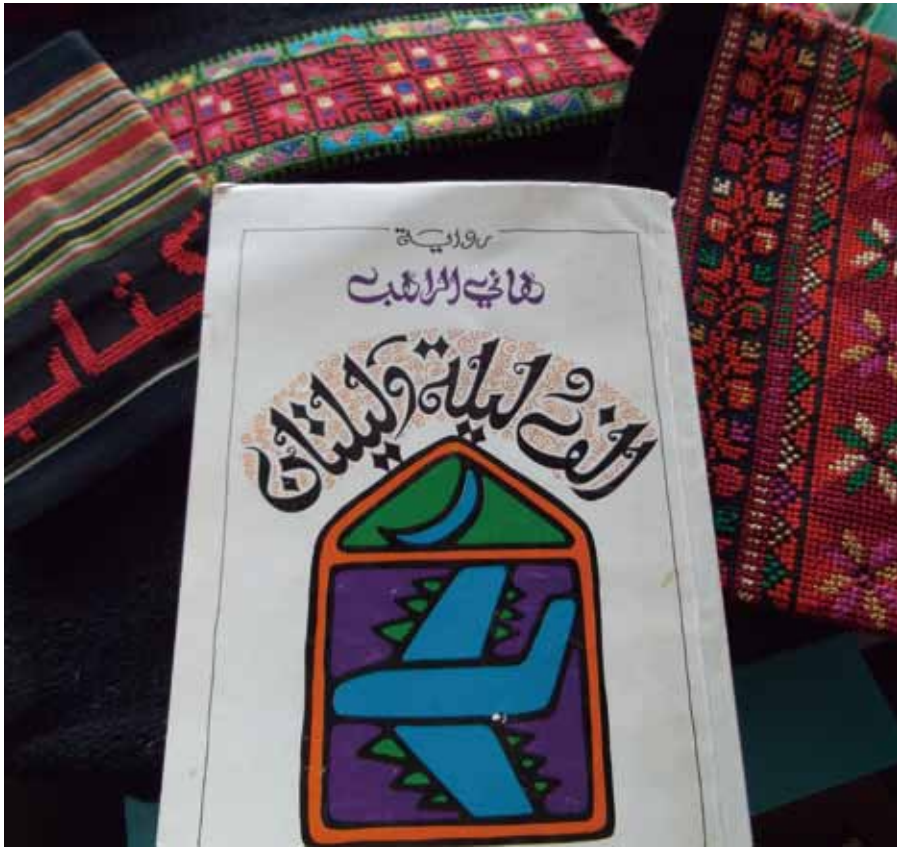
モスク内では、女性はスカーフをつける。アラビア文学の美しさに引きつけられる

ハードと名付けることもある。真面目に努力する人であってほしいという思いが込められた名前である。そこにはジハードが特定の宗教と結びつくという意識はない。しかし現在、アラブ諸国における宗派抗争、さらに昨年（二〇一四）、七世紀のカリフ制度の復活をもって建国宣言とし、イスラーム国を名乗った組織の活動はイスラモフォビアの拡散に拍車をかける結果となっている。アラブ諸国の宗教指導者たちは、イスラームへの誤解を招くとして、報道機関にこの組織についてイスラームの名称を使用しないよう求めているが、その効果は期待できそうにない。E・サイードは、一九八一年に著した『Covering Islam』（邦訳は『イスラム報道』みすず書房、一九八六）でイスラームを報道（cover）すると言っておきながら隠す（cover）ことによって誤った事実、イメージを定着させている報道の在り方を厳しく批判したが、三十年を経た現在、ニュースの作られ方は当時とほとんど変わっていない。情報を集める道具が進化すればするほど事件の本質は見捨てられている感じがしてならない。アラビア語教育においてイスラームは避けて通ることができないテーマである。それはアラブ諸国の大多数がムスリムであるということだけによるのではなく、アラビア語自体がイスラームの根幹を形成していることによるのである。

紛争と前近代的でかつ危険な宗教であるイスラームという両者につながる地域の言葉。アラビア語に付きまとうこの二つの壁を克服し、学生たちにアラビア語学習の意義、面白さを伝えるにはどうしたらよいのであろうか。次回はその為の工夫について、またアラビア語教育の目指すところ、そして現状、さらに前述した二つの壁を自らの力で乗り越えてアラビア語を選択する学生たちの問題意識について述べてみたい。

最後に本稿のタイトルについて言及しておこう。誰もが知っている千夜一夜物語、シャハラザードが語り続けた物語は、千夜一夜目でハッピーエンドを迎え、完結したはずであった。ところが二十世紀に入り、この物語にはまだ続きがある、と訴える人物がいた。一九七七年、ベストセラーとなった『千夜二夜』を著したシリアの小説家ハーニー・ラーヒブがその人物であった。小説は、一九六七年の第三次中東戦争下のアラブ人を描いている。開戦からわずか六日間でアラブ諸国は壊滅的打撃を被り、イスラエル軍にゴラン高原、ヨルダン川西岸、ガザ地区、シナイ半島という広大な土地を占領された。これを契機にイスラエルの安全と土地の交換という戦略の下、パレスチナ問題の主導権は完全にイスラエルが握ることになる。ラーヒブは、この敗北を単なる軍事的敗北ではなく文明的敗北としてとらえ、その背景には千夜一夜の世界にどっぷりとつかって眠りこけていたアラブ人の堕落した精神にあるとした。そして千夜二夜目に入ったアラブ人は、覚醒し、新たな時代を築くはずであると希望を抱きながら物語を終えている。ナクサ（大破局）と呼ばれるあの屈辱的な敗北から四十年あまり、アラブ人には何度覚醒の機会が訪れたのであろうか。覚醒の機会が訪れるたびに新たな夜を数えるならば今、彼らは千夜何夜の世界に生きているのであろうか。それとも近年アラブの春と呼ばれた大きな社会変動のうねりの中で飛び交うアラブ人の叫び声は、覚醒というよりも眠りを妨げられたことに対する単なる苛立ちの表れなのであろうか。

シリア南部、ボスラの円形劇場、その巨大さに圧倒される



パレスチナ刺繍とラーヒブの小説『千夜二夜』

ESSAY *Alternative tourism*

バックパッカー街点描

ホーチミンシティの「夢」空間

大塚直樹

バックパッカー街とは

バックパッカー（Backpaker）と聞いて何を思い浮かべるだろか。

かつて（今も）日本においてバックパッカーのバイブル的書籍といえば、沢木耕太郎の『深夜特急』があげられる。同書は、航空機で香港・バンコクを経由してデリーに入り、デリーからロンドンまで乗り合いバスで向かう青年（沢木本人）の旅の記録である。沢木が旅をした一九七〇年代は、海外旅行がいまだ高嶺の花の時期であった。ただし、著書『深夜特急』は、一九八五年のプラザ合意以後、円高ドル安が進展し、多くの人々にとって海外が相対的に身近になりつつあった時期に出版された。こうした背景から『深夜特急』は、海外に憧れもつ多くの若者に受容されていった。

バックパッカーにはさまざまな定義があるが、『広辞苑』では「バックパックを背負って自由に旅行する人」とある。もう少し詳細に検討すると、その特徴として、ホテル代を節約しながら長期滞在すること、現地の人々や他の旅行者との交流を楽しむこと、パッケージツアーではなく個人旅行を好むこと、滞在先の日常生活に対して積極的に興味を持つことなどがあげられる（Loker-Murphy and Pearce, 1995）。また、マスツーリズムへの対抗概念から「カウンターカルチャーとしてのガイドブックや旅行経験者の口コミを利用して情報を収集しつつ旅をする人々」（*Ibid.*）と位置づけることもできる。

朝、次の目的地へ向け出発するバックパッカー（2014年3月）

ブイヴィエン通りでもスーツケースを使う旅行者が増えつつある（2014年3月）

以上のような人々が集う空間がバックパッカー街と名づけられることが多い。しかし現在では、必ずしもリュックサックを背負わないでバックパッカー街に宿泊する旅行者が出現している。厳密な定義が存在するわけではないが、こうした人々は、スマートフォンを代表とした多くの電子機器を携帯し、節約という概念を前面に出さずに旅をする特徴をもつことから、「フラッシュパッカー」と呼ばれる（日本経済新聞ウェブ版〈日経プラスワン〉二〇一三年十一月三十日付）。また、ここ数年「バックパッカーの旅行をしたい」ということばを耳にする。こうした言説からは、手段として旅の形態がバックパッキングになるのではなく、先のバックパッカーの定義から逸脱し、バックパックの旅それ自体が目的化しつつあることもうかがい知れる。

この小稿では、ベトナム、ホーチミンシティのバックパッカー街を取り上げ、その空間的特徴を捉えてみたい。当該エリアは、ホーチミンシティの中心部から南西に一キロメートルほど離れている。なお、ここでは、ファムグーラオ通り、ブイヴィエン通り、グエンタイホック通り、ドークアンダウ通りに囲まれた地域を便宜的にバックパッカー街と呼ぶ。

旧版地図にみるバックパッカー街

次のページの図1に、ベトナム共和国時代に再版されたフランス植民地時代の旧版地図（一万分の一）のうち、現在のホーチミンシティのバックパッカー街周辺をトリミングして示した。ここから、以下の二点が確認できる。第一に、現在のファムグーラオ通りの北側にはすでに廃止された駅が存在していたことがわかる。フランス植民地時代にサイゴ

ンとメコンデルタの都市ミトーを結ぶ鉄道が敷設された。そのターミナル駅としてサイゴン駅がこの場所に位置していた。

第二に、現在のバックパッカー街は、当時、駅の北側と比較して、建物の密度が低く、土地利用が稠密的ではなかったことが推察できる。単純に測量等が実施されず、地図に描かれなかった可能性も残る。しかし、その場合でも当該地域に対して「地図に記載する必要性の低い地域」という認識があったことは否めない。

図2に、テキサス大学図書館に保管された一九六一年発行の旧版地図のうち、図1とほぼ同じ領域をトリミングして示した。ここから、現在のバックパッカー街が未だ稠密的な土地利用ではないものの、少しずつ道路整備などが実施されていることがわかる。特に、図1と比較して、ファムグーラオ通りの南側に並行する現在のブイヴィエン通りとその周辺の整備が進んだことを読み取れる。

図1

フランス植民地時代のバックパッカー街（アジア地域研究所所蔵、一部）
現在の街路名：①グエンタイホック通り、②ファムグーラオ通り、③デタム通り、④ブイヴィエン通り、⑤ドークアンダウ通り

図2

ベトナム共和国時代のバックパッカー街（テキサス大学オースティン校図書館〈http://www.lib.utexas.edu/maps/vietnam.html〉所蔵、一部）

サイゴン・スカイデッキから撮影した旧サイゴン駅。写真上部中央の緑地部分（公園）が旧サイゴン駅、その左手奥にバックパッカー街が広がる。サイゴン・スカイデッキは、2010年10月31日に落成したビテクスコ・フィナンシャル・タワーの49階にある（2013年8月）

バックパッカーとシクロ。このエリアではシクロ（三輪車）をよく見かける。シクロはフランス植民地時代からある乗り物（2014年12月）

さらにベトナムに関する近藤紘一のルポルタージュによれば、一九七〇年代当時のファムグーラオ通りは下町であった様子がうかがえる。ファムグーラオ通りには、近藤のベトナム人の妻の家が位置した。近藤は、妻の実家を「ごく中層の庶民階層に属する」（近藤、一九八一）とした上で、当該地域に長屋づくりの町家が立地し、妻の実家の隣にはパンの直売工場（仕事場）があることなど当時のサイゴンの日常生活を生き生きと描写している（近藤、一九八五）。ただし、同書（近藤、一九八五）の初版では、妻の家がファムグーラオ通りではなく、旧サイゴン駅を挟んで北側にほぼ並行するブイティスアン通りに立地していたと記述されている（近藤、一九七五）。

ここから、現在のバックパッカー街とその周辺は、かつてベトナムの北と西へ向かう旅の出発地としてのサイゴン駅に隣接したエリアであったこと、ベトナム共和国時代以降、下町的な居住空間を形成し始めていたことがわかる。

ガイドブックの表象

先に述べたように、バックパッカーの定義の一つには「パッケージツアーに

コンビニエンスストアを利用するバックパッカーも増えてきている（2012年3月）

参加するのではなく、ガイドブックなどを利用して個人旅行を好むこと」があげられている。『地球の歩き方』は、こうしたガイドブックのうち日本でよく知られたものの一つである。二〇一四年十一月現在の最新版『地球の歩き方　ベトナム』（二〇一四―二〇一五年度版）では、ホーチミンシティのバックパッカー街が見開き二ページで「ベトナム最大のバックパッカーエリア　ブイビエン（ママ）通り&デタム通り」という見出しで紹介されている。本文では、安宿エリアであり、格安ツアーを手配する旅行会社やカフェがあること、カフェやレストラン、食堂、コンビニエンスストアなどが立地し便利であり、現在ではおしゃれでリーズナブルなカフェや各国料理の店舗が増えつつあること、同時にベトナムの庶民的な生活を体験できることが記されている。

バックパッカー街の夜景。夜になると通りには旅行者向けに簡易「酒場」ができあがる（2012年3月）

また当該エリアは、『地球の歩き方　ベトナム』（一九九五―一九九六年版）に初めて登場する。見出しは「リーズナブルな旅ならファングーラオ（ママ）通りをめざせ！」となっている。本文では、リーズナブルな個人旅行者向けのエリアであること、欧米の旅行者が集うカフェがあり、そのカフェではツアーも開催していること、庶民的な生活に出会えることが記載されている。

新旧のガイドブックからみると、まずホーチミンシティのバックパッカー街は、その中心が旧サイゴン駅に面したファムグーラオ通りからデタム通りおよびブイヴィエン通りに移行してきたことがわかる。さらに、両ガイドブックともに、安宿街かつベトナムの庶民的な生活を垣間見られるという点では記述が共通するものの、最新のガイドブックでは「（コンビニエンスストアに代表される

ブイヴィエン通りのインド料理屋。HALAL（ハラール）の文字も見える（2014年9月）

ファムグーラオ通りを歩くバックパッカー。この通りには旅行会社が林立する（2014年12月）

ような）便利さ」や「おしゃれ」などバックパッカーの定義とは必ずしも一致しないような記載がなされている。後者については、バックパッカー街が大衆向けに変化しつつあると捉えてもよいかもしれない。

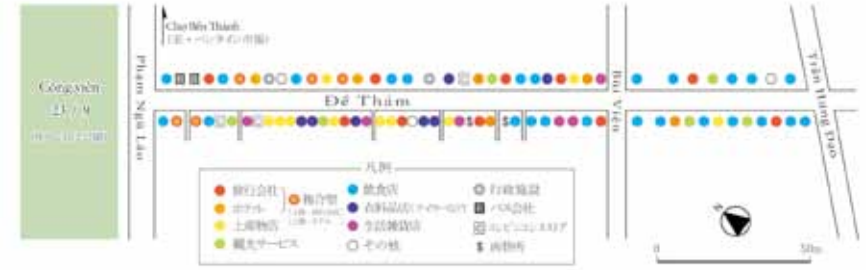
バックパッカー街の現在

では、バックパッカー街は現在、どのようになっているのだろうか。図3に、デタム通りの空間構成を示した。最新の『地球の歩き方』にも記載されていたように、ファムグーラオ通りから南下するデタム通りは、ファムグーラオ通りと並んで、ホーチミンシティを訪問したバックパッカーが集う路上空間になっている。

デタム通りの空間的な特徴として、まず建物の間口が非常に狭く、奥行きが長いことがあげられる。多くの建物の間口は三―五メートル程度である。ただし、これはデタム通りの特徴という以上にベトナムにおける都市空間の景観的な特徴ともいえる。

デタム通りの街並み（2014年3月）

図3



デタム通りの空間構成（2014年3月および8～9月に実施した筆者らの現地調査を元に作成。作図者：丸山宗志）

建造物の種別をみると、大きく宿泊施設、旅行会社、飲食店、土産物屋、衣料品（テイラー）に分類することができる。特に、ホテル、旅行会社および一階が旅行会社（兼、ホテルのフロント）で二階より上階が客室になっている建造物が目立つ。また、デタム通りには、ホーチミンシティのバックパッカー街における老舗旅行会社ともいわれるシンカフェ

テイラーと土産物屋が隣接する。デタム通りにて（2014年12月）

（現在、シンツーリスト）が立地している。その名称から類推されるように、ホーチミンシティでは、かつてカフェにおいて、カフェの経営者や旅行者同士が旅の情報交換をしていた。前掲した一九九五―九六年版の『地球の歩き方』におけるカフェの記述もこうした事情を背景としている。

宿泊施設、旅行会社、飲食店、土産物屋は、主として旅行者をターゲットにした施設であるのに対して、テイラーは必ずしも旅行者に特化した業種ではない。実際、こうした店舗では、スーツ、ドレスやアオザイなどを仕立てており、店内に旅行者の姿をほとんどみかけない。推測の域をでないが、テイラーという業種は、バックパッカーが形成される以前から立地していたのかもしれない。また、デタム通りの西側には多くの路地が存在する。路地を入ると、複雑に入り組んだ小道の両脇に現地の人々の住居や雑貨屋、宿泊施設など多様な建物が混在している。

デタム通りとファムグーラオ通りのT字路。手前がファムグーラオ通り（2014年3月）

旅行会社の長距離バスの出発を待つバックパッカー（2014年12月）

さらに近年の特徴として、コンビニエンスストアなど外資系を含めたチェーン店が増えつつあることがあげられる。特に、コンビニエンスストアは、便利さを求める旅行者には欠かせない存在であろう。また、交渉で価格が決まるベトナム社会にあって、定価が示され、かつ旅行者の出身国でもなじみがあるチェーン店の存在は、バックパッカー街への「敷居」を下げると同時に、旅行者と現地の人々との交流のパターンを変化させる要素を含んでいる。

路地裏に立地するミニホテル・ゲストハウス（2012年3月）

以上のように、ホーチミンシティのバックパッカー街は、かつてターミナル駅が位置した旧サイゴンの残映を感じさせる下町的な空間、ふるくはカフェで、現在ではカフェから転身した専業の旅行会社やさまざまな飲食店などでの情報交換を行うバックパッカーの交流空間、フラッシュパッカーに代表される現代的、言い換えれば大衆化したバックパッカーにとっての「聖地」体験の場など、さまざまな人々のさまざまな「夢」が複層した空間として捉えられる。かくいう筆者もフィールド調査の名を借りて、こうした空間体験をするフラッシュパッカーの一人なのかもしれない。

引用文献など

近藤紘一『サイゴンから来た妻と娘』文春文庫、一九八一年。
近藤紘一『サイゴンのいちばん長い日』文春文庫、一九八五年［サンケイ新聞社出版局、一九七五年］。
沢木耕太郎『深夜特急』（一～六）新潮文庫、一九九四年［新潮社、一九八六・一九九二年］。
Loker-Murphy, L. and L. P. Pearce, Young budget travelers: Backpackers in Australia, *Annals of Tourism Research*, vol. 22, issue 4, 1995, 819-843
「フラッシュパッカー」スマホ片手に世界ぶらり：日本経済新聞（日経プラスワン）<http://www.nikkei.com/article/DGXDZO63325590Z21C13A1W03501/>（最終閲覧日：二〇一四年五月二十四日）

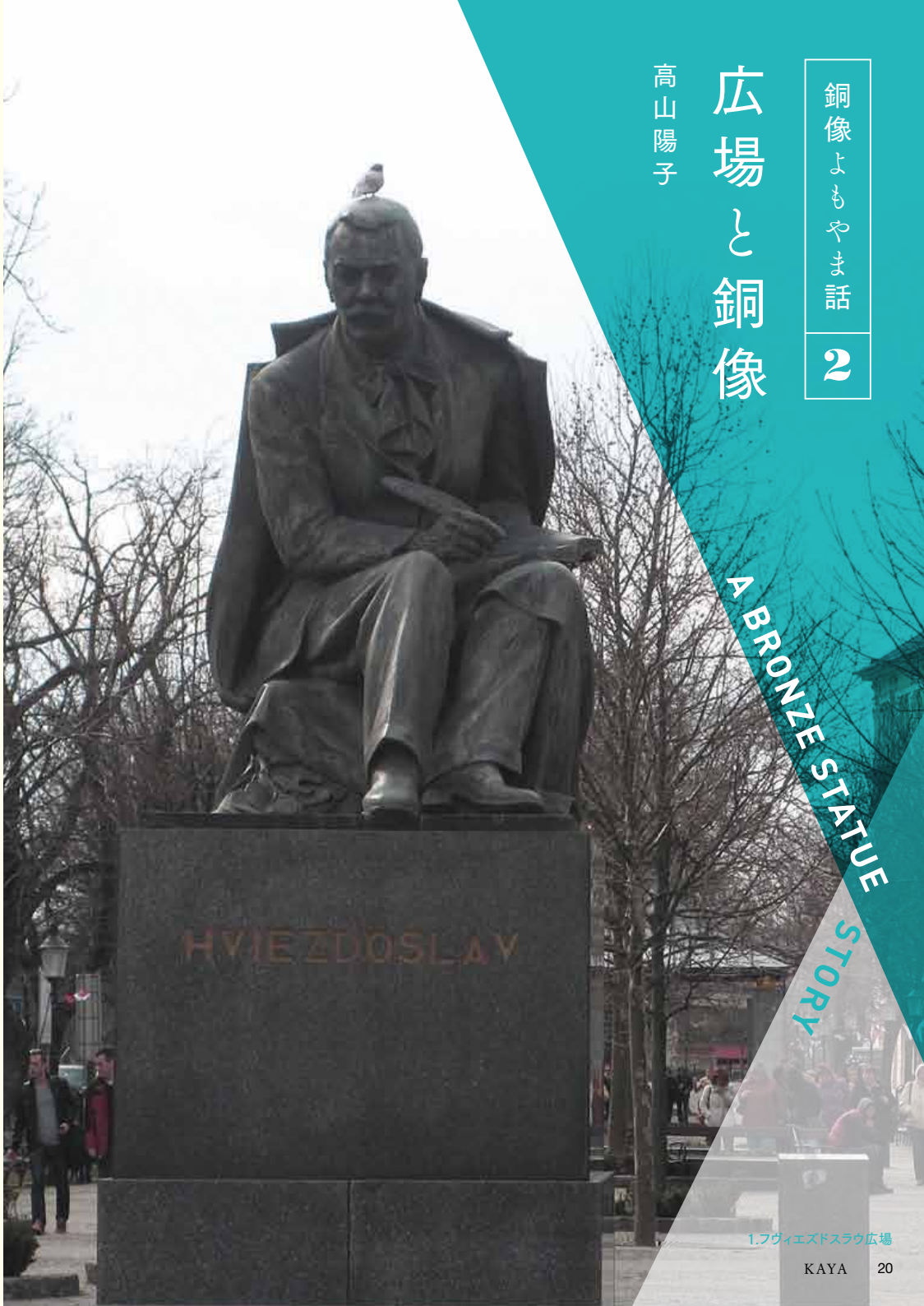
路地裏のミニホテル。朝には野菜や果物を売る行商の姿も見られる（2012年3月）

銅像よもやま話 | 2

広場と銅像

高山陽子

A BRONZE STATUE STORY



1.フヴィエズドスラウ広場

銅像の上には、しばしば鳥が留まる（写真1）。オスカー・ワイルド（一八五四～一九〇〇）は、『幸福な王子』という小説において、銅像と鳥の組み合わせを描いた。宝石を散りばめられた王子の像は、ツバメに対して貧しい子どもたちに自分の宝石の一部を運ぶように頼んだ。王子に頼まれたツバメは毎日、王子の宝石や金を子どもたちに運んだ。冬が来てツバメは寒さで動けなくなり、王子の体の宝石も金もなくなった。最後には、王子とツバメは天国へ行った。

2.ルイ14世像

子ども用の絵本はここで話が終るが、実際には続きがある。ボロボロになった王子の像を見た市長と市会議員は、像を溶かして、その場所に自分の銅像を立てるべきだと主張し、論争になった。論争が続く間、王子の像は溶鉱炉へ運ばれたが、心臓は解けることなく残った。そして王子の心臓とツバメは天国へ運ばれた。

この話は、銅像の特徴を物語っている。すなわち、人びとは、普段、銅像の存在を忘れているが、しばしばある空間に政治的権力が発露するときに、銅像の存在を意識するということである。現在、銅像は公共芸術の一つであると見なされているが、かつては芸術というよりも権力の象徴に近いものであった。フランスのブルボン朝ではルイ一三世やルイ一四世（写真2）、ルイ一五世などの歴代の国王の銅像が建てられてきた。また、ヨーロッパの古い町では、教会や市庁舎の並ぶ広場に領主や聖人などが建てられている（写真3）。銅像以外では、

3.聖イシュトヴァーン像

噴水（写真4）やオベリスク（写真5）がある。

フランスの架空の村を舞台にした映画『ショコラ』（二〇〇〇年公開）には、教会前に立つ銅像が何度も登場する。この銅像は、村の指導者レノ伯爵の祖先という設定である。この像はレノ伯爵の権威を象徴する存在として映画に登場する。保守的なレノ伯爵は、村人に教会に来るように勧めるが、村人は教会よりも新しく村にできたチョコレート店に関心を示す。レノ伯爵は、他所からやってきてチョコレート店を開いたヴィアンヌに敵対心を抱き、村から追放しようとするが、最後にはヴィアンヌのチョコレートに心を開くという話である。

銅像と広場の描写は、村の人びとの教会への関心を暗示している。村人が教会に無関心なときには、銅像にピューピューと冷たい北風が吹きつける。最後にレノ伯爵がヴィアンヌを受け入れ、村で祭りを開いた際には、銅像は花で飾られ、人びとがその周りで踊っている。銅像そのものは変化しないが、最初は悲しそうであり、最後には笑っているように見える。

このように、ほんの一瞬であるものの、映画の中には銅像がよく登場する。その理由は、銅像がその場所を特定させる機能を持つことと、広場が出来事の発生現場になることが多いことにある。例えば『ショコラ』では、最後に祭りが催された場所が、教会前の広場であった。

広場で起こるポシティブな出来事としては、祝祭が挙げられるが、ネガティブな出来事には、武装蜂起とそれに対する反撃、公開処刑などがある。前近代のヨーロッパで行われていた公開処刑は、人びとへの見せしめでもあり、娯楽でもあった。パリのコンコルド広場にはフランス革命後、ギロチン台が置かれ、ルイ一六世やマリー＝アントワネットなど多くの人びとの処刑が行われた（写真6）。

この広場は、かつてルイ一五世の銅像があったことからルイ一五世広場と呼ばれていた。一八三〇年、コンコルド広場と名前を変え、エジプトから寄贈されたルクソール神殿のオベリスクが一八三三年に建てられた。このオベリスクはクレオパトラ・ニードルと呼ばれたが、クレオパトラとは直接関係がない。

『戦場のピアニスト』（二〇〇二年公開）の冒頭は、ワルシャワの町を舞台としている。一九三九年九月、ドイツ軍がポーランドに侵攻した際、ワルシャワの聖十字架教会のキリスト像とコペルニクス像が映る（写真7）。ポーランドの人びとの心の支えである二人の人物像の前をドイツ軍が進軍するこの場面は、ポーランドの人びとの尊厳を踏みにじったことを見る者に感じさせる。

コペルニクス（一四七三～一五四三）

4.ローマ バルベリーニ広場

5.ボン マルクト広場

6.コンコルド広場

7.コペルニクス像

は、ショパン、キュリー夫人と並ぶポーランドが誇る偉人である。コペルニクスがかつて学んだポーランドの古都クラクフのヤギェウォ大学では、第二六四代ローマ教皇、ヨハネ＝パウロ二世（一九二〇～二〇〇五）も学んだ。ヨハネ＝パウロ二世の銅像は世界各地にあるが、写真8は、クラクフのストレゼレッキ公園に立つものである。

8.ヨハネ＝パウロ2世像

多くの銅像は広場に立つため、その周りにはスポーツに興じる若者から年配者まで多くの人びとが集まる。普段はそこの銅像を意識するわけではない。にぎやかな広場には、サンドウィッチやビールなどを売る屋台が軒を連ねる。ヤン・フスの銅像があるプラハの旧市街広場もその一つである（写真9）。宗教改革の先駆者として知られるヤン・フスは、ローマ＝カトリックを批判し、一四一五年七月六日、火炙りの刑に処せられた。彼の死後、ボヘミア（現在のチェコ）およびポーランドのフス派と、ローマ＝カトリックおよび神聖ローマ帝国の間で戦争が起こり、フス派は敗北した。

フスの銅像は、フスの没後五百年を記念して、一九一五年七月六日、プラハの旧市街広場に建てられた。それは、オーストリア＝ハンガリー帝国の支配下にあったボヘミアで独立運動が盛り上がっていた時期であった。フス像はボヘミア独立運動のシンボルにもなった。そして、ボヘミアは、一九一八年十月、第一次世界大戦の終結直前にチェコスロバキアとして独立した。

しかし、独立の二十年後、チェコスロバキアは解体し、再び、独立した後は社会主義国となった。東西冷戦期、ドプチェク首相が「人間の顔をした社会主義」を目指し、検閲の廃止や政党の復活などの改革を行ったが、八月、ソ連とワ

9. 旧市街広場

ルシャワ条約機構軍がプラハに侵攻し、ドプチェク政権を倒した。これに対して、大学生のヤン・パラフがヴァーツラフ広場で焼身自殺を図った。ヤン・フス同様に、ヤン・パラフもチェコの「英雄」として現在でも人びとの尊敬を集めている（写真10）。

隣国のハンガリーでは、一九五六年、スターリン体制に対して、ブダペストで

10.ヴァーツラフ広場

市民が蜂起した。このきっかけは、一九五三年のスターリンの死と一九五六年のフルシチョフによるスターリン批判であった。ハンガリーでは首相に就任したナジ・イムレ（一八九六～一九五六）が改革を行ったが、一九五五年、スターリン派によって失脚させられた。

一九五六年十月二十三日、ブダペストでナジの復帰や言論の自由などを求めるデモが起こり、ナジは首相に復帰した。デモは暴動へ発展し、ソ連軍が介入した。ナジは、事態を収拾するためソ連軍と交渉し、ブダペスト郊外へ撤退させたが、なお郊外に留まるソ連軍に対して即時撤退を求め、さらにワルシャワ条約機構からの脱退を宣言した。するとソ連軍はブダペストへ再び侵攻し、数千人の市民が犠牲となった。

ハンガリー動乱の経緯は、映画『君の涙ドナウに流れ―ハンガリー一九五六』（二〇〇六年公開）に描かれている。ソ連軍が一度、撤退する際に英雄広場を通過する場面があり、再びブダペストに侵攻する前の場面にも、英雄広場が映る。英雄広場は、オーストリア＝ハンガリー帝国時代の一九〇〇年に完成した。中央に王冠と十字架を持つガブリエルの柱があり、その周辺にはイシュトバーン一世などのハンガリーの英雄および聖人の像が並ぶ（写真11）。一九八九年、ナジ・

11.英雄広場

12.マートリスト広場

イムレの名誉が回復され、再埋葬式が行われた際には、この広場に多くの人びとが集まった。また、一九九六年に建立されたナジの銅像は、国会議事堂を見上げている（写真12）。この銅像は一般的な銅像と異なり、小さな橋の上に立っている。

最初の写真1は、フヴィエズドスラウ（一八四九～一九二二）というスロバキアの詩人・劇作家の銅像である。スロバキアの首都、ブラチスラヴァのフヴィエズドフラウ広場にある。一九八八年三月、この広場で社会主義体制に対する抗議集会が開かれたが、警察に徹底的に鎮圧された。翌年、チェコスロバキアでは「ビロード革命」と呼ばれる民主化が進み、一九九三年には、流血の惨事を招くことなく、チェコとスロバキアが分離した。

その国の英雄や偉人の銅像は、旧市街の中心広場に立つ。屋台や土産物屋が並ぶにぎやかな場所であるため、人びとが集まり、人びとがこぼすパンくずを目当てに鳥たちも集まる。たくさんの鳥に囲まれると銅像は、フンまみれになるが、街の中心広場にある偉人たちの銅像は、こまめに手入れされているので、いつでもきれいである。

銅像は、大きな出来事があったときに存在意味を示す。政権が代わって独裁者の銅像が倒されるときや、英雄の業績を顕彰するときなどである。それ以外のときには、談笑する人びとと鳥たちに囲まれて、穏やかに街を見下ろしているのが幸せな銅像である。

ゼミの風景

ゼミナール紹介
Seminar introduction

伊藤ゼミ

「将来に生かせる“深く学ぶ楽しみ”」

伊藤裕子

国際関係学部では、世界で日々起こりつつある国際紛争や事件がまさに学ぶための教材となる。戦争や事件の背景を歴史的・文化的に理解し、現状を政治学や国際法の枠組みから分析し、議論を戦わせる。学生たちとこうした作業を進めていくのは楽しい。

教員側から基本的な知識や枠組みを提供する場が講義であるとすれば、ゼミは学生たちがお互いに切磋琢磨しながら思考力を伸ばしていく場であろう。学生一人一人が各講義や自主学習で得た様々な知識をシンクロナイズさせて自らの意見として発現させ、それを相互にぶつけ合うことでさらに思考を高めていけるのがゼミの醍醐味だと思う。

私のゼミでは戦後日米関係を中心に様々な国際問題を扱うが、実りあるゼミ学習を実現させるためには学生と教員双方による周到な準備が必要である。ゼミ運営については毎年模索の繰り返しだが、今年度のゼミ生はとても

活発によく学習しているので、以下紹介させていただこうと思う。

【ゼミの事前準備】

専門ゼミの前期は、主に戦後日本外交史のテキストの輪読が中心である。良質なテキストを皆で読み分析や討論をすることで共通の知識基盤を作ってもらうことがその目的である。学生たちは毎週全員、課題の部分のレジュメを作成し提出しなければならないが、これがかなりの負担であるらしく、前日の水曜日は「地獄の水曜日」と呼ばれている。しかしこの作業はゼミ討論の活性化には不可欠なので、私は学生の悲鳴には耳を貸さない。

司会を担当するチームにとってはさらに事前準備が大変である。テキスト課題から重要な論点を選び、討論の進め方を事前に考え、必要があれば各ゼミ生に作業を割り振る。この学生同士の事前準備にＬＩＮＥを利用するところなど、今どきの学生だなあと思う。ゼミ連絡用のメーリングリストもあるが、十八人の学生同士の事前相談にはメールよりもＬＩＮＥのほうが便利だし、和気あいあいとやっているらしい。そこに教員が入って堅苦しくなっては申し訳ないので私はＬＩＮＥには入らない。いや、入れてもらえない（笑）。私からは重要な論点を外さないよう、各週の司会者チームに事前にアドバイスするだけである。

ゼミの集合写真

【ゼミでの討論】

このような準備を経てゼミ当日の討論が行われる。例を挙げれば、ある週のゼミのテーマは戦後日本外交史テキストの一九五〇年代の部分であった。ゼミ生たちは、司会者グループが選んだ①サンフランシスコ講和条約、②日米安全保障条約、③日ソ国交回復、④当時の日中関係、という四つのテーマに関して各自で事前学習し、ゼミ当日は資料を持ち寄るなどして四グループに分かれて討論を行った。最後にグループごとにゼミ全体で発表と討論を行い、最後に質疑やコメントを受けて終わった。

また、テキストを離れて時事問題を扱うこともある。ある国際紛争について賛成派と反対派に分かれてディベートを行ったり、一人一人が関係各国の代表に扮して模擬国際会議を行うこともある。普段の自分自身の考えとは異なる立場から議論したり他国の利害を代弁することで、今まで気づかなかった他国の事情を知ることにつながり、良い勉強になるようである。

当初私は、学生たちがどの程度真剣にグループディスカッションをするのか半信半疑であったが、実際に教室内を回りグループ毎の討論の様子を観察していくと、学生たちは与えられたテーマで真剣に議論をしている。討論に熱が入り時間が足りなくなることも多い。こうしたディスカッションの時間において、私の役回りは大きくない。グループの間を歩き回って討論の様子を聞き、そこに一言二言、コメントを注入し、学生の思考を深めたり気づいてほしい点に注意を振り向けたりする。また、全体発表の最後に時間を少しだけ残してもらい、学生が見過ごした点をコメントして更なる思考を促す。いわば触媒のような役割である。

場合によってはゼミでの議論を踏まえて自分の考えをあらためて文章にすることもある。執筆前に詳細なアウトラインを作成して自分の考えを整理し、それに沿って論理的に主張を展開することを心がけてもらう。そうすることで他人の文章をコピーするのではなく、「自分の考えを文章化する」ことができてくるだろうと期待している。

【卒論作成に向けて】

後期からは、卒論作成を意識したゼミ内容になっていく。まずは夏休みの課題として課題図書リストから一冊の本を選んで読み書評を書いてもらう。課題図書リストはしっかりした研究に基づいて書かれた、しかし読みやすい薄めの図書のリストである。後期のはじめにこれらの書評の報告会を行うが、おおむね学生たちはそれぞれの本の特徴を良くつかみ、上手に紹介し、適切な批判もしているように思う。これをきっかけに卒論のテーマを決めていくという学生も毎年数名いる。

後期の十月～十二月の時期は、卒論のテーマを個人個人で検討しつつ、全体では論文を輪読したり時事問題に関するディベートをしていくことが多い。

論文は毎年いろいろなものを読むが、今年度は「国際関係学の有名な論文を読んでみよう」という趣旨で、ジョン・L・ギャディスの「長い平和」(John L. Gaddis, “The Long Peace”)とサミュエル・P・ハンティントンの「文明の衝突」(Samuel P. Huntington, “The Clash of Civilizations?”)の二本を選んだ。いずれも発表当時に世界的に注目され賛否両論を巻き起こした論文である。学生たちは苦労しながらもこれらの論文の内容を把握し、優れた点や批判すべき点、今も妥当と思われる論理枠組みや

すでに時代的に古く妥当性を欠く点など、的を射た批評をしてくれた。他方では「イスラム国」の勢力拡大など現在進行中の国際情勢も取り上げてディベートを行ったが、その際にも講義や論文で得た知識や考察が役に立ったのではないかと思う。

【教室を出て現場体験】

以上のような「読む・調べる・議論する・書く」といういわゆる「机上の学問」に加えて、やはり自分の学ぶテーマを実地に見て実感を持って理解するという体験も欲しい。多文化コミュニケーション学科に比べて国際関係学科のほうがどうしても実地体験が少なくなりがちだが、今年度は夏に二回ほど「課外活動」をすることができた。一つは七月に秋月弘子先生のゼミと合同で、国連大学で開催された国連開発計画の「『人間開発報告書』国際公式発表・公開ダイアログ」に参加したことである。ここでは国連開発計画（UNDP）のヘレン・クラーク代表や緒方貞子元国連難民高等弁務官、安倍晋三総理、そして各国からUNDP関係者たちが集うのを目の当たりにし、「国連機関」の雰囲気を味わうことができた。また、日米同盟や在日米軍基地の是非についてゼミでディベートするなかで、ぜひ基地を見てみようということになり、九月に横田基地で開催された自衛隊と在日米軍共催の「日米フレンドシップ・フェスティバル」に出かけた。普段入ることのできない米軍基地の中に入り、広大な土地が米軍に貸与されている現実とおびただしい数の日本人がこのお祭りにやってきて楽しむ様子とを目にして、学生たちはいろいろ思うところがあったようである。こうした「実地体験」は普段の学習をより身近なものと感ずるためにも意義のあることであろう。

国連開発計画（UNDP）にて

UNDP会場となった国連大学

UNDP会議場の亜大生

以上が私のゼミでの学習の様子である。上記の取り組みを真面目に一生懸命やっている学生もいれば、ただなんとなく受け身にすごしている学生もいることは否めない。ゼミでの学習が活発に行える年も、静かになってしまう年もあることも事実である。しかし、課題に対してできる限り自己学習し、友達同士で議論し切磋琢磨する中からさらに思考を高めてより深い理解に到達し、学ぶことの楽しさと意義を感じ取ることは、毎年すべてのゼミ生に経験し身に着けてもらえたらと日々願っている。そうした経験は大学卒業後どんな職業についたとしても必ず生きてくると思うからである。

横田基地日米友好祭

横田基地日米友好祭

横田基地日米友好祭（オスプレイ）

沖縄普天間基地

沖縄平和の礎

2014年 夏季 中国

フィールドワーク

三橋秀彦

成田空港にて

一、はじめに

二〇一四年夏、筆者の三年ゼミは北京でフィールドワークを行った。本学赴任の翌年である一九九九年にパイロットとして開始して以来、今回で十四回目の北京におけるフィールドワークである。二〇〇三年（SARS）、二〇〇八年（北京オリンピック）、二〇一三年（参加者なし）は実施できなかったが、それ以外の年は二〇〇一年から現在まで、AUGP（中国）に参加し、留学先の北京師範大学滞在中に調査を行うスタイルは一貫して継承されている。長年、三年ゼミの夏季研修として実施してきたフィールドワークであったが、この夏、新たに大学の正規科目「多文化フィールドスタディー」の現地演習の扱いとなった（写真1）。

二、「多文化フィールドスタディー」（中国）

今年の調査テーマは「中国におけるインターネットショッピングと日系ブランドの構築」である。詳細は後述するが、二〇一四年九月の中国電子商取引最大手アリババ（阿里巴巴）のニューヨーク証券市場上場を前にした高揚感を受け、学生達がこのテーマを選んだことは容易に想像できよう。

水曜日四時限の「多文化フィールドスタディー」の授業では、四月の開講後、学生達と教科書（池尾恭一ほか『マーケティング』有斐閣）を読んでいった。日頃、学科科目でマーケティングのような経営分野の知識に触れることが少ない学生に対し、少しでも企業活動の魅力を感じ、夏の北京での調査ではさらにそれをグローバルに体験してもらいたいと思ったことが教科書選択の理由である。十五回の授業を通じて、「消費者行動」「消費者データ」「市場細分化と標的設定」「ブランド政策」などマーケティングの主要分野を概観し、そこで学んだ知識を前提に七月中旬、今年度のテーマである「中国におけるインターネットショッピ

景山公園

頤和園

中国人民抗日戦争記念館（盧溝橋）

「多文化マーケット」準備（天意小商品城）

ングと日系ブランドの構築」が決定された。

三、「AUGP（中国）」とフィールドスタディー

「多文化フィールドスタディー（中国）」は、同じ科目が開設されている他の地域（韓国、ベトナム、フィリピン）にはない特徴をもっている。アンケート調査を行う期間は今年度については八月二十五日（月）から二十九日（金）までの五日間に過ぎない。ただ実質的には学生たちが北京に到着した八月三日（日）以降の四週間にわたる長期のフィールドワークである。

北京到着後、学生達は北京師範大学の中国語クラスに所属し、三週間にわたりAUGP（中国）の学生として平日の午前中は中国語を学んだ。八月四日（月）に始まる最初の週は、中国語の授業が終った午後は街歩き等文字通り異文化体験である（写真2～5）。

ただ二週目からは日本で学んだマーケティングの概念と北京到着後の一週間で各自が感じた中国社会の現実を踏まえアンケートを作成していった。同時期、筆者は並行して実施された「多文化インターンシップ」の支援のため香港、深圳に滞在した関係で、この期間の作業は学生達自らが仮設をたてチームとして一枚のアンケートを作成することであった。八月十三日（水）の筆者の北京到着後は、指導教員として学生達のアンケート作成作業に加わった。ただ不在の間学生達自身でまとめたアンケートの設計アイデアに対して抜本的修正を迫ったことは、容易に想像できよう。そのあと、何度かの修正作業を繰り返し、最終的に確定したのは配布日前日の八月二十四日（日）であった。

四、企業視察

AUGP（中国）では二〇一一年から企業視察をプログラムの中に組み込んでいる。中国で活動する日系企業を訪問し、直接、担当者の方からお話を伺うことで、中国ビジネスに関する皮膚感覚のようなものを学生に感じてもらうことがその目的である。

今年度は調査テーマ（「中国におけるインターネットショッピングと日系ブランドの構築」）の後半部分（「日系ブランドの構築」）にこだわり、中国において日本イメージを代表する企業三社（長富宮飯店、セブンイレブン、ダイキン）とさらにはインターネットではないが中国メディアの代表格である中国中央テレビを訪問した。

八月十八日（月）、最初に訪問した長富宮飯店（ホテルニューオータニグループ）（写真6）では、館内の施設見学の後、宮本総支配人を初めとする日本人幹部の皆さんから、中国で営業する日系の代表的ホテルとして、最高水準のサービスを提供すべくいかに努力しているかについて話を伺うことができた。「日本ではできて中国での再現が難しいサービスは」「インターネットを利用したプロモーションの効果は」等、学生からも突っ込んだ質問が出されたが、昨年に続き二回目の訪問であることもあってか、和やかながらも課題を含め率直な話を伺うことができた。

八月二十日（水）にはセブンイレブンの東直門店を訪問した（写真7）。同店はセブンイレブンの北京における第一店である。インタビューテーマとして学生に関心の高い商品の「現地化」をお願いした。これに応えてくださり、店内では長年、食品部門の新商品開発の責任者を担当された万部長から、自らがこれまで手掛けた新商品を直に手に取りその苦労話や成功体験を伺うことができた。

八月二十一日（木）は、これまでとは趣向がうって変わり中国中央テレビの本社社屋訪問である。北京の代表的ポストモダン建築として名高い建物に厳重なセキュリティを経て入るだけで学生は興奮気味であったが、目的地である中央コン

長富宮飯店訪問

セブンイレブン訪問

中国中央テレビ訪問

ダイキン（中国）訪問

トロールルームに入った瞬間、その興奮は極限に達した（写真8～10）。中国中央テレビが誇る五十チャンネル全体が一つ空間に映し出され、それはあたかもNASAの中央制御室に入ったかのようであった。五十チャンネルという数に学生達は驚いたが、日本のNHKが五チャンネル、中国の総人口が日本の十倍以上であることを考えると合理的な数ではないか。この説明に、多民族国家中国のメディアのスケールの大きさを学生達は感じたようである。八月二十二日（金）は企業訪問の最終日。ダイキン（大金）（中国）を訪問した（写真11）。学生達に「ものづくり大国」日本を、海外で感じてもらいたかったためである。日本二十七％、アメリカ二十二％、中国十七％。これは同社の二〇一五年度の地域別売上目標である。エアコンの専業メーカーとして海外ニーズを果敢にとりつつ世界No.1の地位にまで上り詰めた同社にとって、大気汚染等深刻な環境

北海公園にて

問題を抱える中国市場での成功が、同社のグローバル戦略にとっていかに重要かを実感した訪問だった。

五、アンケート調査

街に繰り出し人々の消費行動を観察。企業を訪ね企業人から生産者の視点を感じる。こうした一連の準備作業を経て、八月二十五日(月)から「多文化フィールドスタディー」にとっての最大の山場であるアンケート調査が始まった。六名いたメンバーのうち二名は、八月二十四日(日)から、「多文化インターンシップ」のために北京を離れ深圳に移動した。このため、北京での調査は残り四名で実施された。

初日の二十五日(月)午前に、中国語で書かれたアンケートを印刷し、午後から滞在先の北京師範大学のキャンパスで大学生を対象に調査を実施した。中国の大学生は外国人学生に対して大変フレンドリーである。長年、筆者は学生達のアンケート調査には立ち会わない方針をとってきた。このため今年もアンケート調査はすべて学生達の手で実施された。この日の午後だけで八十枚近くが集まり、その夜、報告に駆けつけた彼らの表情は晴れ晴れとしており、調査に成果を感じたようだった。

翌二十六日（火）がいよいよ本番。キャンパスを出て街頭でのアンケート調査である。北海公園、北京一の繁華街王府井等で、大学生以外の一般の社会人を相手にアンケート調査を敢行した（写真12）。「将来、社会人になって営業等で様々な人と接した場合でも「折れない心」を作る」。このため街頭でのアンケートは、私のフィールド調査では歴代のゼミ生に挑戦してもらっている。

ただ今年は上手く集まらなかったようで、その日の夜のミーティングでは昨晩とは一変し、一日街を歩き回った成果の二十枚を前に呆然とする姿があった。どうかこの日を社会人生活の原点として欲しい。

次の日（二十七日（水））は終日、自由行動日。「折れてしまった心」を修復

北京大学にて

北京師範大学にて

すべく英気を養った。翌二十八日（木）は捲土重来。気を取り直し北京大学のキャンパスでアンケートを実施した（写真13・14）。この日は日本語を学ぶ学生と出会うなど、終始和やかな雰囲気の中でアンケート調査は行われた。最終日の二十九日（金）は、記念と感謝の意味を込め四週間にわたりお世話になった北京師範大学のキャンパスで最後のアンケート調査を実施した（写真15）。八月三日の到着時は真夏の盛りであったが、すっかり秋景色の広がる中での調査となった。

六、帰国後

インターンシップのために途中分かれ深圳に行ったメンバーは、北京での調査テーマ（「インターネットショッピングの現状と日系ブランドの構築」）を、工場で働く農村出身の女工八十名に実施した。インターネット利用に関する都市・農村を比較した興味深い調査である（写真16）。

深圳テクノセンター

従来はゼミの自主活動としてアジア祭で報告会を開いていたが、今年は十一月三日に開催された「多文化インターンシップ・多文化フィールドスタディー」報告会の一部として学生達はチームで報告をした。報告の結果を要約すると、「今後の中国企業によるブランド強化と価格比較が容易なネットショッピングの普及は、価格において絶対的優位性を持たない日本企業に対して、価格に敏感な中国の消費者の間でブランド優位性を維持することを困難にさせる。このため日本企業は中国社会で影響力を持つSNS（ソーシャルメディア）を駆使したプロモーション戦略を構築し、ネット時代に相応しいブランド価値を実現しなくてはならない。」というものであった。今後は北京での調査経験を踏まえ各自、テーマを設定し、卒業作品に取り組むことになっている。

七、おわりに

冒頭、紹介したようにこの夏の調査はゼミとしては十四回目のフィールド調査となる。これまでゼミ生以外の参加者を含めると、計一〇五名の学生がそれぞれのテーマで調査をした。初年度である二〇〇一年の「李登輝訪日問題」（古橋）、「音楽製品に見る中国のコピー文化―WTO加盟前の中国における著作権の浸透」（秋本）、翌二〇〇二年の「訪日旅行解禁―12社調査に見る日本旅行の可能性」（山田）のように、その時々の中国社会を皮膚感覚で切り取ろうとしたテーマもあれば、「ユニクロの対中マーケティングと日中アパレル・繊維産業の変容」（二〇〇一）（越智）、「資生堂オプレの対中戦略」（山田）、「キリンビバレッジの戦い―日系企業の生き残る道in中国」（二〇〇二）（大島）、「日系コンビニエンスストアの中国進出―北京におけるセブンイレブンの現状」（嶋村）、「北京の幼児教育の現状と「こどもチャレンジ」成功の可能性」（二〇〇四）（小巻）と、今年まで一貫して続く「日本ブランドの構築」の系譜もある。特に後者の「日本ブランド」の系譜を今日、改めて眺めてみると、学生達は当該企業の中国進出間もない時期に調査をしていることに気付く。テーマ設定から見る限り先見の明があるように見えるが、実際は学生達が日本で日頃から親しんでいる企業が、果たして中国の消費者に支持されるだろうかという素朴な関心からスタートしたに過ぎない。ただ十年以上前に彼らによって選ばれた企業のいずれもが、今日の中国で成功している日本企業である。これは若い彼らの感性の鋭さを示すと同時に、この十年間で中国にも日本の消費者と同じ感性、志向を持つ人々が着実に増えて行ったことを象徴的に物語るものであろう。

最後に。今年はアンケート調査に加え、新たな課題を課した。作文コンクールPANDA杯（人民中国社主催）への応募である。今年の課題は「わたしの眼に映る中国」。学生達の間で中国の印象が鮮明なうちにそれを文章化させたい教師にとって、同コンクールは又とない機会だった。最終的に六名が応募し、ゼミ生ではないがAUGP（中国）のメンバーである経営学部の池部さんが二二二名中十名に与えられる優秀賞の受賞者の一人に選ばれ、奇しくも四カ月後の十二月中旬、再度、中国に招待されることになった。

北京師範大学留学生宿舎にて

フィールドワーク

体験で学ぶ地球環境論

「富士山清掃」

中野達司

1

今年度初めて開講となった当科目（野口健客員教授および筆者担当）では科目名の「体験で学ぶ」に相当することとして「富士山清掃」を実施した。「富士山…」と言っても登頂するわけでなく、産業廃棄物が不法投棄されている山麓でのゴミの処理である。NPO法人「富士山クラブ」の活動に参加するという形で、七月六日（日）に山梨県鳴沢村の青木ヶ原樹海の一角で清掃作業は実施された。その三週間前から実施に向けての授業が行われ、野口客員教授や富士山クラブのスタッフから綿密な事前指導を受けた上で当日に臨んだ。（事前指導の過程において野口客員教授より新著『世界遺産にされて富士山は泣いている』（PHP新書）が受講者全員に贈られた）

七月六日午前九時に亜大に参加者全員（学生五十六名および同行教員等二名注1）が揃い、バスで予定通り出発し、十一時には目的地「なるさわ　道の駅」に到着。海抜九百メートルほどの林間ゆえ東京から着いた者には涼しさと緑の美しさが嬉しい場所で昼食を済ませ（写真2）、十一時五十分から同駅駐車場で開会式。野口客員教授らからの作業を行なうにあたっての諸注意や、行動を共にする山梨県の富士山レインジャーの紹介が行なわれた後、いよいよ作業現場に向かう（写真3・4）。

4

3

2

樹間を歩いて抜けた先に作業現場があったが、周囲は木々や草で覆われているのに、そこだけは土がむき出しのテニスコート一面ほどの平地であった（写真5・6）。写真6の右端、茂った草の根元部分が本来のその辺りの高さなのであるが、左側の作業現場となった所にはダンプカーで運び込まれた廃棄物が捨てられ、その上に土が被せられたのだそうで、ご覧の通りの高さになっているのである注2。そこで行なった作業は、より的確には「ゴミ

6

5

8

7

10

9

掘り」であった。富士山クラブのスタッフから具体的な作業手順などの指示を受けた後、予め決めてあった十二の班（各班四、五名）に分かれ作業開始。用意されていたシャベルやヘラを用い、銘々ゴミに挑む。作業は三十分単位で、数分の休憩を挟み、正味九十分実施。

慣れない作業であったと思われるが、野口客員教授の指導も受け、出てくるゴミに驚きながら参加者は各々労を惜しむことなく奮闘し、楽しそうでさえあった。「戦利品」はコンクリート、金属、…と種類別に回収したが、得体の知れないものも含め種々雑多なものが出てきた。中には男子学生のグループが九十分、懸命に掘って、そして引き抜こうとしたが、埒があかなかったパイプ状の金属もあった（写真7～12）。

九十分の作業を終えると、集合しての記念撮影をし、バスの待つ駐車場

12

11

14

13

で、解散式（写真1・13）。帰路、学生は朝の起床が早かったせいか労働の疲れか、少なからずが爆睡（写真14）。中央高速道路の渋滞もあって往路の倍近い時間がかかったが、十八時三十分に無事亜大着。天候にも恵まれ（前後の日は雨模様ながら、この日に限り雨は上がり、野外での労働にはうってつけの曇天）、富士山清掃の初年度実施は無事に終了した。

現地での清掃実施後の三回の授業は報告書の作成およびその発表にあてられた。野口客員教授から報告書作成の意義を聴き、また清掃自体にもご同行くださった小林明さん（東京都公園協会）の、より具体的な指導を受け、受講者個人および班としての報告書が作成され、富士山清掃に参加して知ったこと、考えたことが文書にまとめられた。班単位の報告書については七月二十三日の授業を学内外公開の報告会とし（遠くは栃木県からの参加者あ

15

16

り！）、十二の班が各々の主張を展開した。報告後、小林天心教授（経営学部ホスピタリティマネージメント学科）、および報告書作成をご指導下さった小林明さんからの講評があり、野口客員教授の締めのスピーチをもって閉会した。特に優れていると評価された班の報告書は、山梨県に提出された（写真15・16・17）。

17

18

注1　参加した学生は国際関係学部多文化コミュニケーション学科の正規受講者五十四名および他学部の希望者二名であり、同行したのは東京都公園協会の小林明さん（長らく公園行政に携わってこられ、小笠原の自然保護などにも造詣が深く、樹木医でもある）、および筆者であった。

注2　富士山クラブのスタッフによると、今般の当科目受講生のようなボランティアの協力によってゴミ回収を続けた場合、この区画からのゴミ回収が完了するのは二年先であろうとのことであった。写真18にある袋にはこれまでにその区画から回収されたゴミが詰め込まれている。仮にゴミの物理的除去が完成しても土壌が化学的に汚染されていたら…。捨てた者などの関係者の環境意識の低さ、ごみ行政の貧困のツケはあまりにも大きい。

（所載写真のうち、5、7、8、10は小林明氏撮影。15、16は大塚直樹国際関係学部講師撮影。17は亜細亜大学広報課撮影。それ以外は筆者撮影。）

学部行事報告

AUJP Asia University Japan Program

インドネシア人学生との交流報告

増原綾子

二〇一四年八月二十一日から九月九日まで、インドネシアの首都ジャカルタにあるアル・アズハル・インドネシア大学で日本語を学ぶ九人の学生が、亜細亜大学の日本語短期研修プログラムに参加しました。国際関係学部多文化コミュニケーション学科を中心とする亜細亜大学の学生がインドネシア人学生を歓迎し、彼らの日本語学習を補助しました。

歓迎会「自撮り」で盛り上がりました

特に多文化コミュニケーション学科ではインドネシア語を履修する学生が中心となって、五月からインドネシア人学生の校外学習のためのフィールドワークの企画を準備しました。インドネシア人がどんなことに興味を持ち、どんなふうに日本語を勉強したら、よりよく日本語を学べるのか、日本での生活や学習で彼らがどんなことに困るのか、それにどのように対処するのか、そういった点を考えながら、五つのフィールドワーク企画①武蔵境「インドネシアに無いもの探し」②吉祥寺「日本とインドネシアの看板比較」③小金井公園「江戸東京たてもの園巡り」④三鷹の森「ジブリ美術館探訪」⑤渋谷「若者文化体験」を立てました。

多文化コミュニケーション学科の学生は、フィールドワーク当日の引率・運営も行いました。午後にフィールドワークを行い、次の日の午前中にインドネシア人学生が前日のフィールドワークの成果をパワーポイントにまとめ、日本語で発表します。その補助を多文化コミュニケーション学科の学生が行いました。インドネシア人学生と一緒にフィールドワークを行い、彼らの日本語学習をサポートしながら交流を重ねていくうちに、お互い自然と仲良くなっていきました。

武蔵境でのフィールドワーク

ほとんどのインドネシア人学生にとっては初めての日本訪問で、不安もありましたが、多くの日本人の友人ができたことで充実した日本語研修となりました。多文化コミュニケーション学科の学生にとっても、初めてインドネシア人の友人ができて、自分たちの身近にある日常生活や日本の文化を彼らに紹介するための大変よい機会になりました。日本文化に強い興味を持ち、日本語を勉強して日本人の友人がほしいと願う、若いインドネシア人が大勢いるということもわかりました。

AUJPは今年から始まったばかりのパイロット・プログラムですが、亜細亜大学の学生にとっても、アズハル大学の学生にとっても、実りの多いプログラムとなりました。

学部行事報告

第56回アジア祭「多文化マーケット」

新妻仁一

1.多文化マーケット入り口の中華街の門

2.韓国の市場の様子

3.南・東南アジアの市場の様子

多文化コミュニケーション学科は、二〇一四年度、第五十六回アジア祭に「多文化マーケット」の企画をもって参加した。多文化マーケットは、学科で教えられている六つの地域言語に従って教室を区分けし、そこにそれぞれの言語と関係が深い地域の市場を再現したものである。赤色に塗られた迫力ある大門に迎えられ（写真1）、中国と韓国の屋台が並ぶ東アジアの市場（写真2）を抜けると窓から差し込む陽光を計算に入れて、インドのガネーシャ像が置かれた南アジアの市場やインドネシア、ベトナム、フィリピンなどに見られる東南アジアの野菜市場が再現されていた（写真3）。狭い通路に向かうと、きらびやかな金細工が目を引く中東の市場（写真4）。アラビア語で名前を書くサービスもあった。その先は、ソンブレロと死者の日の祭りで飾られる色鮮やかな頭蓋骨が並ぶラテンアメリカの市場（写真5・6）。そして一休みしたくなった所には多文化広場が設置された。そこでは留学生による自国紹介が行われ、地域言語、多文化マーケットの紹介用動画も流された。また出口前には多文化検定ボードが配置され、見学者の関心をより深めた。

その地域のことを知りたければ市場を歩けと言われる。市場は、その地域の文化と知り合う最良のフィールドである。多文化とは多様な市場と換言してもよい。そしてその市場を再現することは多文化コミュニケーション学科の学びとは何かを発見し、それを学内外に発信することに他ならない。新学科の第一期生が国内外での学修経験を積み、学科を背負う人材となる三年生になった時にアジア祭に参加しようと教員、学生ともにアイデアを出し合ってきた。成果もあれば課題も残った企画であったが、学生たちの学習の成果が次年度は、またどんな企画となって表現されるか期待したい。尚、多文化マーケットについてはこの企画を機に発行された「多文化便り」とともに、学部ブログでも紹介されているのでぜひアクセスしてほしい。

4.中東の金スーク

5.ラテンアメリカの市場の様子

6.メキシコ：「死者の日」にちなんだ骸骨のお土産

国際関係学部の「今」がわかる

国際関係学部BLOG 更新中！

亜細亜大学　BLOG　検索

国際関係学部BLOGとは？

グローバル化時代を迎え、国際関係学部の研究・教育活動は日々変化しています。そうした「今」を発信すべく2013年3月に当ブログはスタートしました。

視覚にうったえたい！

文字情報だけでなく、写真を多く用い、学部の教育活動をイキイキと伝えられるよう留意しています。

タイムリーな発信に力を入れています！

国内外のフィールドワークやインターンシップ、ゼミ活動など、学生の経験を熱いうちに情報発信することで臨場感を伝えます。

実は…更新しているのは教員です！

学部教員が持ち回りで更新をしています。

今後にもご期待ください！

国際関係学部により関心を持ってもらうため、今後も学部独自の取り組みを紹介していきます。

ブログへのアクセスはこちらから　Check!

http://www.asia-u.ac.jp/academics/international/blog/

執筆者紹介（五十音順）

伊藤 裕子（いとう　ゆうこ）
国際関係学部国際関係学科・教授。主な研究分野は、国際政治・アメリカ政治外交史。

大塚 直樹（おおつか　なおき）
国際関係学部多文化コミュニケーション学科・講師。主な担当科目は、観光地理総論、フィールドワーク入門。

高山 陽子（たかやま　ようこ）
国際関係学部多文化コミュニケーション学科・准教授。主な担当科目は、世界遺産論、テーマパーク論。

中野 達司（なかの　たつし）
国際関係学部多文化コミュニケーション学科・教授。主な担当科目は、体験で学ぶ地球環境論。

新妻 仁一（にいつま　じんいち）
国際関係学部多文化コミュニケーション学科・教授。主な担当科目は、西アジアの社会と文化、アラビア語。

増原 綾子（ますはら　あやこ）
国際関係学部多文化コミュニケーション学科・准教授。主な担当科目は、インドネシア語、東南アジアの社会と文化。

三橋 秀彦（みつはし　ひでひこ）
国際関係学部多文化コミュニケーション学科・准教授。主な研究分野は、比較社会学・現代中国研究。

KaYa 国際関係・多文化フォトジャーナル vol.02

2015年 3月31日発行
発行：亜細亜大学国際関係研究所
制作：株式会社キンデル

問い合わせ先
亜細亜大学国際関係学部
〒180-8629 東京都武蔵野市境5-24-10
http://www.asia-u.ac.jp/academics/international/

本雑誌記事の無断転写を禁じます。
©2015 Faculty of International Relations, Asia University